

第1話 「地下水に育まれた暮らし(富士山山麓の湧水)」

地下水コラムの第1話では、富士山麓の湧水の利用を題材に、地下水によって育まれた私たちの暮らしについて述べることにします。

富士山麓には多くの湧水が分布していますが、その代表的な一つである「柿田川湧水」は、わが国の湧水の中でも最大級の湧出規模を有し、名水百選の一つにも数えられています。この湧水の周囲には縄文時代から中世までの多くの遺跡が分布しており、大昔から、湧水を中心とした人間生活が営まれ続けられてきたことが推察されます。

鎌倉時代になると、言い伝えの中に、湧水のことが見られるようになります。例えば、源頼朝が巻き狩り(狩場を四方から取り巻き、獣を追い詰めて捕らえること:広辞苑)の宿として使った狩屋の北側には猪之頭という地名がありますが、当時は湧水の最初の場という意味の「井之頭」と呼んでいたとのこと。この湧水は現在も養鱒用として利用されています。また、同じく、源頼朝が富士巻き狩りの際、中の茶屋(吉田口登山道)で兵士の渴を救わんと鞭を以て岩を打つと水が湧いたと伝えられています。この湧水は、泉端(仙水)と呼ばれており、最近まで富士吉田市の上水道水源となっていました。



柿田川の湧水と三島梅花藻

富士山を霊山としてあがめる信仰はるか昔に始まるとみられますが、富士信仰においては、富士山の本体(御山)、登山に関わる宿坊など(山内)、及びそれ以外の地(俗界)、の三つの世界に区分されていたといわれています。ここで、俗界との接点を示すところが浅間神社であると考えられていたので、登山者はそこで水垢離(みずごり)をとって身心を清浄にしていました。富士宮浅間神社に残された富士曼荼羅(ふじまんだら)と呼ばれる宗教画には、湧玉池(現在、国の天然記念物に指定されている)で数人の男が裸で池水につかり、水垢離をとっていることが表現されています。



浅間大社 湧玉池

(<http://www.city.fujinomiya.shizuoka.jp/e-museum/fujiyama/man.index.htm>)

地下水は遠く昔から私たちの暮らしを育み続けてくれています。現代においても地下水は、上水道用の他、工業用、農業用、水産用など、多くの産業で広く用いられています。また、河川の水質や流量を一定に保つ役割、人々に潤いある親水空間を与えてくれるなど、環境資源としても大切役割を持っています。この地下水を守り大切に使い続けることが、私たちの願いです。

(ま)